



音楽に想いをこめて

～なぎさっ子のクリスマス音楽会～

なぎさ公園小学校
教諭 福島英子

2005年12月11日(日)、今年度からは学校を飛び出してエリザベト音楽大学セシリアホールで「クリスマス音楽会」を開催した。なぎさ公園小学校にあるパイプオルガンよりもさらに大きなオルガンとともに歌った「歓喜の歌」は、会場中をまさしく歓喜の渦に巻き込むほど素晴らしいものだった。



■1年生

クリスマスの音楽会

音楽会を開催することは、学びの成果を発表する場であり、発表によって大きな達成感を得られる意味からも大切であることは言うまでもないが、クリスマスに音楽会を開くにあたっては別のねらいも持っている。

「クリスマスって何だろう、どんな日だろう？」と子どもたちに問いかけ、この季節に何かしら感じる幸福感、日常の家族からの愛、友だちや周りの人への愛ややさしさなどを意識させ、考える機会にすることだ。

1年生の「にんげん」の授業でこの問いを投げかけると、驚くことに、子どもたちからは、「プレゼント」「ケーキ」「パーティ」といった楽しいイメージと共に、クリスマスを悲しみの中で迎えてはならない人たちへの思い

やりの発言が、毎年必ず出てくる。これは、自分自身と家族のことから周りの世界へと視点を向ける社会的な観察と思考の力の働きである。どうしたらみんなが楽しいクリスマスになるのだろう。悲しんでいる人には何をすればよいのだろう…。子どもたちはそれぞれの心でゆっくりと考え始め、さらに音楽が大切なメッセージを心にじんわりと訴えかけていく力があることにも気づき始める。

音楽を通して子どもたち自身が何かを表現したりメッセージを伝えたりする経験と、想いを込めた音づくりや歌声づくりの豊かな実践の機会。これはまさに、本校の4つの教育の柱のうち「グローバル生活人(共創・共生感)」「ふるえる心(感性)」の育成プログラムなのである。



■2年生

発想と表現力を伸ばす教科の連携

音楽のみならず、他教科でもクリスマスのイメージから一歩外界へ視野を広げるようなきっかけとなる授業づくりを展開している。

一例を挙げると、低学年では遊びの世界旅行月間(11月)に行う「不思議」「みちくさ」の授業である。世界の遊びや食物を体験したり、直接海外の方のお

話を聞いたりして、他の国の子どもの生活を思い浮かべる力を育てている。各教科の様々な仕掛けが、子どもの心と頭の中で融合して、イメージの幅が広がっていくのである。

また本校では、各教科の学習で必ず「表現」を意識した指導をしていることもあり、子どもたちの表現力の成長はこれらの日頃の取り組みによることも大きい。

音楽の場合、美しい合唱づくりに取り組むだけでなく、創り上げる過程において歌声、音創りに様々な想いを込める経験を仕組む授業づくりはもちろん、発表に際しては、子どもたち自身に発表の喜びと成果を実感させられる内容にしていかなければいけないと考えている。

しかし、「音楽」だけでなく、「にんげん」「不思議」「英語」などの他教科での学びが発表内容や進行に自然に関わられるのが本校の音楽会の特徴と言える。このような教科との連携効果として、子どもたちの豊かな発想と表現力が伸びやかに広がっていることが、今回の音楽会の発表で証明されたように思う。



■3年生

当日のプログラムから

初めて使わせていただく会場なので、

前々日にリハーサルを現地で行った。学校とは全く違う会場の雰囲気を体感して、子どもたちのモチベーションはさらに上がり、当日は程よい緊張感で臨んでいたようだ。

形式は以前の形と変えることなく、子どもたちが司会進行を担当した。そのシナリオも子どもたちによって考えられたものである(3年生までしか在籍していない現時点では、多少教員の補助が入っている)。

プログラムについては、クリスマス色は全体合唱で出す程度にとどめ、1年生は「少年少女冒険隊」(子どもたちの大好きな歌)、バンブードラム(左右のばちの音の違いに着目して創ったリズム発表)、「ゆうやけこやけ」(和音の響きを感じて歌う)に挑戦し、2年生は音楽ものがたり「スイミー」(歌+朗読、短い音づくりも入れる)に挑戦した。また、3年生は、「海のファンタジー」(子どもたちによるシナリオで、歌+朗読、音づくり)に挑戦した。これらはすべて、本校のシラバスに沿って学習してきた成果の発表である。

聴き手の小学生はもちろん、特に保護者の方たちは、小さな音も聴き逃さないように、ひとつひとつの表現を大切に聴こうとして下さっていたので、舞台上の子どもたちは大変気持ちよく、堂々と発表していた。

今回の音楽会後の児童の感想をいくつか紹介したい。

「きんちょうしたけど、たのしかったです。」「クリスマス音楽会は大せいこうだと思います。」「～そこまで、きんちょうしませんでした。たぶん、た

くさんのお客さんに見守られていたからだと思います。」「ソロがうまく歌えたのでうれしかったです。」「～ぼくは、体がうごいて、とても、のりのりでした。お客さんにも、はく手ももらってよかったです。』

こういった感想が沢山あり、子どもたちの充足感、達成感が感じられた。



■3年有志ハンドベル



■司会の児童

クリスマス音楽会を終えて

なぎさ公園小学校では、週2回の朝の会、月1回の歌の会で、季節の歌、行事の歌などを歌い、聴きあう機会を持っている。また、クラスタイムや「にんげん」の授業などいろいろな教科でも歌を取り入れているので、小学校での日常の様々なシーンは歌にあふれている。歌に始まり歌に終わる一日。子どもたちは季節を歌い、心を歌い、学んでいるのである。音楽の授業は子どもたちにとって特別なものではないようだ。こちらからの投げかけにはどの子もすんなりと、しかも積極的に取

り組める。音楽会でも2、3年の発表にソロを多く取り入れたが、希望者が多すぎて全員を採用できなかったほどだ。

ソロを歌う子どもたちは休憩時間、遊びを我慢し練習に取り組んでいた。発表に臨むにあたって子どもたちから「練習は大事だね」との感想も出ており、音楽会は努力する大切さも実感できるよい機会だった。また、日頃からパイプオルガンの音に親しんでいるためか、パイプオルガンと張り合うのではなく、響き合おうとして歌う姿にはこちらが感動を覚えた。

発表のスタイルは子どもたちの発達、学年のカラーに応じて、年々変わるかもしれないが、子どもたちの力で進めていくという部分は変えることなく徐々に拡大していきたいと考えている。しかし、無理をせず(子どもには少し高い目標を与え)、一人ひとりの子どもの達成感と「楽しかった」「また、やってみたい」という気持ちを大切にしたい。

クリスマス音楽会に集う人々が心を一つにし、歌う喜びや音楽を通して、人の幸せや平和を考える。この貴さを、これからも子どもたちと一緒に味わっていききたいと思う。



■3年生